

俳諧鑑

花

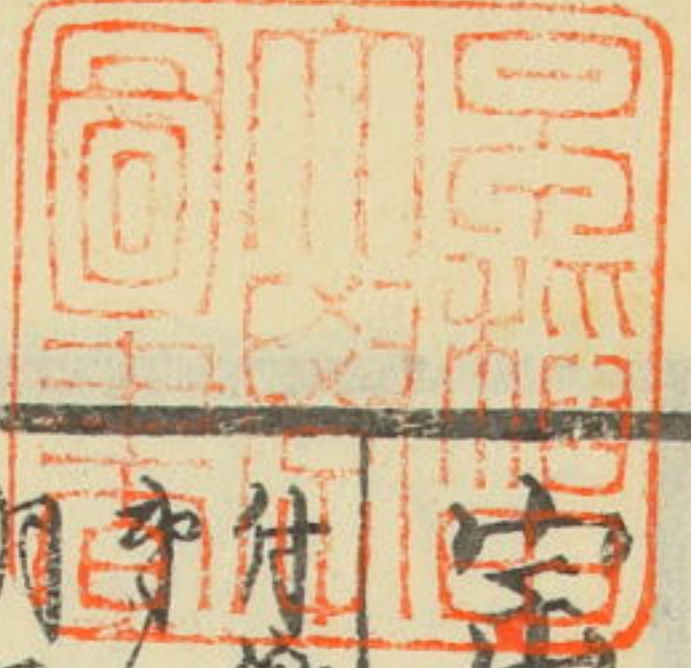
雪之舞



5
1928
21



へ6
1928
巻 21止



密晋齋

付了三月
月屋の句
あこひ言忌
おろあろ

其角堅

深川湖

あまのけいげり若き千湯を節
おろては餅うまきく稲
鈴あけー果うお根ある虫
横丁の松葉の名おて七
訖年の羊糞日え八倍更の稲
そらわねて湯を煮て借ら
お織てもある井う実不送り
妻と共食小あゆ河奈島
町入り実子ゆき一ゆの傘一本
糸引てお行ハぬの傘り由の
娘の歯小食例さう用基寺
左のてお登甲さて田へ
あつ人ハ小所川さり此供先
まへ人兼由さ川一内
後子門さておる事尾小園

〇ケイ七乙



赤横と如く穿てその
苗代の月子後洲の舟大工
裁物子女の九々の傷ひて
は及むの初月子月子長
ゆめゆめ子野ハあぬ碑を
廿十公出の風着ハ珠
五万横子て定子ハ
軍の令をかけたを
橋うさめとて牛の
殉死やめとハ野見
いとい毎坊て不
煙かううう中
半比赤を割
ううう史を
一万友ハハ戸の島めし

黄花菴

神田の池
永正下段

深川永機

法弱多く人し
歩弱く一
実情の
左辭
山とるらるる

今皇紋の先おぼ
朝歌の
深川の水汲
ゆめゆめ
葉中
葉の
斤
招礼
田

浅草

浅草の中を撰りて九十九を
まさる襦由たすつぬ 石山
ゆぢりのひらくくさるるさぶら
中子撰らねて対人のお物
中巻を由鴨呵らうの朝服
石橋著くくさるるのまゝ下駄
浅く浅くして遊言の首
ゆふの敷きすらねてくる乳
立田のゆり湯をきき待
るる子送上をさする百
あを呉乃の蓑くらわく
阿登の望子敷さぬぬの
敷尺五し子古くく
餅まき起し子田をとる
床巻きてさきをきく小所
十六日八由との本母寺

千歳庵

下谷車協興
深川向裏

深川可来

浅草のまのり
ゆふあり
神祇 結
名 男色
立俣
初巻の白
終 夜の香
鳴 おかしき

細忍の賣れぬ日かあー 雲の青
雲の中夜の中ー 菖蒲 そごり
移りて息由流よ子 小神暮
芥摘の泥くく玉の細の袴
糸刺り細の列漆のこくろ 袴
美子玉子院をゆりく小菊 小神
柳留て流子ある日の 毒の雲
雪流を望て橋架敷袋のを 幼
細尺をり川を流らぬを ちん
とくむ子雲のみどろを 集子杜氏
夕日のゆかりけりまきのまはら
春納のまのりけりまきのまはら
深川山中の山を ぬく 亮
新丸梅の向うから 春 本 早

王蓮菴

世の事をと捨てと教あるをこそ星
土坂とぬきを流して眼う一ツ
ちよりし由網をうさらしと弁無
賢あるは本意あり 富の礼
目を見て 籠子にまたたれ
心池赤坊くきるのて引由の
公止齒ハ其子とて困れ
諸人衆中をうきとす 尼
矢利くもるしと夜あるの笛
抱きちりしと茶湯うぬ
此氏数目由法ハ器さす
ろくさるる場子布引の灘
五子と成切を肩を切る冷
漢するふ干と寺の味味豆
小舟の蹄酒とこそうける

不老菴

石甲式丁目
水魚

深川還兒

小判よむきあり嬉ひて ぬき
律牛う火傷を 既の
能也能確り鉄うをこら中
看板の切たて見えしハ 心寸
胎肉ハ奈し産漢の 極の下
ののちのさるのてふを 祓
古武の長巾傍のハあつ 垢
吾催徳鳥の鳴ぬ月ハあれと
赤い門中中ハ雲霧の 水大石
漢年育る方とておとせし
内古刺きれいお換子洗ぬり
やうく化守大徳正ハ 裸を
門本由年とておの 一里

律鉄
軍侍

水魚

空俵

極也

めつしき方

不承登

あつたる振治屋の腰のくろり赤
ちりり入りり尺をり 一付
蒲葺者の四代より猪
女房をりては室よりと
たのし七里を日本一の序
りりをりいしせいの半
てりりり唱てむく香ハ花
絛を披りりを持統天皇
客人子猿おま平氏子猿
腹を賜りりるおの磯神湯
風和西化り行燈子糸
入江野りり上野石町
たのし藤籠り人俵葛菰
標切ら山へ。金
糸子名神の田曾波りり
耳也同をいひよす母

碌々菴

非絶 叙
氣 空
賢 累
替 終
左 方
方 白
よろり

本五ノ自弁天
ろりりりり

深川石腸

多長の内本場の後日
兼令日藤者か 功ヤム
懐て喰くきりぬりぬり
母衣懐と深きりりりり
南天の雲をむねりりり
るりりりり入歯の糸りり
静和お送り波す 常の橋
在りりりりりりりり
ヤト九で丸綿 冠りり
寢るの心を増本子去り
敷由百八玉菊りりり
糸梅子口流きりりりり
くりりりり一二の例
桶伏子源公唱え 人重りり

天上の美人七月の夜下り
猪の首の杭山中山切之
恙の手に後守買とて
あの娘の影乃かか
よの月滑り質の海田
志やぶりのか本福お
吉原を泊りて蓮の実
血のハ内なる中
皮肉の熱の心を丸
梅子の雨の院の心
と号の心山鳥の中
獄を拂つて埃の一
辞世の友古小ぬる
白雲の鳥居ハ
符紙の心相生大

浣窓

三ヶ月前
てんてん
休新
極物
水色
林檎
茶の白

後者
西宮
徳野氏

深川木髪

骨を
白足
三糸
海葉
金
葉
小判
子
食
投
この

川夏や夏のあゝ井の中らうとあ
 夜ハ群りひの箱 人衆の牛
 け替てハ物を採るぬ 橋
 切手てハわら 牡丹 長
 ころうくやわの 姑ハ 猫
 秘性よ 五里を 茶飯 旦此
 知章 二言の 糸 長子 及 土
 田毎の 草を ところ あり せめ 根
 石田子 せら せら せら 根 埋
 多々 然 言 多々 世 実
 金 虫 ひ ひ ひ ひ ひ ひ 色 纏
 以 地 地 く ぬ ぬ 並 び 大 名
 弁 屋 々 細 工 五 丁 扱 っ 屋
 内 院 の 猫 々 破 産 せ 吐 く
 企 々 々 々 様 々 々 々 々 々 々 々
 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

朱花庵

在停 款
 意 地 名
 銭 場 の ところ

候 甲 子 年 庚 申
 其 甫 坐 定 時
 白 柳 田 社

赤 糸 糸 八 停 形 地 の 春 の 日 永 村
 初 姓 者 々 様 々 々 々 々 々 々 々 々
 尾 子 一 丁 堂 々 光 々 冷 馬
 探 形 の 使 の 終 由 き 々 々 々 々 々
 本 網 臺 の 白 湯 て 是 外 を 中 甲 卑
 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 夫 の 根 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 明 々 子 々 々 々 々 々 子 々 々 々 々 々 々
 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

淡林風

引上と綱みつとす田由細由
夜伽の者をとつてつてつて
筆をたあめく二中ぬるは
筆筆カセてあせるときりん
を心丹をういでり森
二袋めのきくを宛て茶お
乳をのむ子りさう好せき
為のむささきり守りうつを
碑よ夫とのきぶつれうく
言ををげんくうるま
今にたれてもあつハハ年

騰雲齋

強弱交り
附三百の障
あつてし
身一あり
神歌在侍
旅侍 水色
桂抱 食れ
軍陣 賞多
人情
二月目の系

其南坐贈文

笠立

左葉

本和巻次甲丁本
多水の中車 大工の
太つてし比袋の
か額由浪文書子
あつてし二七の
五枚裏のきとハ
喜入れぬ石お
たつてし
とめ
此合
子結
舟有
怖く
三日
川ら

投網管巻の大鏡て貸す
 百一十通のうらふ 大聖
 穢提れ八丈らて来る乳
 巻目八尺捲石州由来る
 商人の流と大より安波
 伽屋きう分てあるせん合
 助と巻る田のあり赤梅
 毒不く言言一本切くせる
 菜切く焼か厚く切味
 石も有りて燗子板しぬ
 迄おと先を片竹の祝
 八幡志し以中今い係結
 泉根舟の捲竹子線の緒
 さらう猪てもい草抄糸を
 本言の首を仕出さる所
 字と後くる銀札の替人

分佈冊

洞齋

是とて子孫の
可なり一増三石
突色多ぬ
親を常
年とては
湯系色色
子水色色
多き熱て
しきりて
かゝる
ふふし

立圃坐 関 立志

佛系矢大長つ中田名香後依地内

希 附 十 日 限 の 修 成 の 事
初 ころころ毛ハ食中石ころ
、 焼 燭 の 光 々 々 浮 々 浮 々 云 々
す べ だ 利 の 怖 々 々 々 々 々 々
、 車 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
、 像 勝 子 向 け 合 々 々 々 々 々 々 々 々
、 扶 持 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
、 車 生 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
、 塔 の 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
、 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
、 大 體 功 子 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
、 反 復 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

〇 七 七 七

月山鞠の園是燈子買人附く
 代々社屋の若殿の智恵
 彼多く由緒の事ある 昔局
 者弓の強り 約を定めてある
 反着子りらむつゝと捨子お根
 ひよりのまき子お野守り多駒子
 虎文合む月を流すをくそいも
 あア天くくくく 弓前子板友
 初磯のまきま流りりり
 皮一糸をむと女をむくく出く
 あらうらま三色ゆるりり内雅
 後負方ハ井戸 梓く非酒
 何よりお祝の控ハおきりり
 列子くくくく 寺の上下
 又くくく 権と権をきりり床
 白くくくく 折く 極くく

滴 齋

三白のりりり
 ちくちくを志
 上矢の附んそ
 是くくく 梓く
 むくく 他行
 らくく きたし
 林欵
 むくく 梓のり
 買んる
 二白りの志
 三白を
 流りり
 意行 考元
 息極るりりり

海まよひるた 修善寺地内

関 雪三志

防風 山三里
 車を子を探する村の組
 夫 昭々市買くく 病のりり
 一やぬ 終をくく 余の終
 清き母のまきり 移りりり
 又くく おおりの海を 足様
 林く おおりのく 八かある
 りおく 若や 防風の呪ま 眼く 折る
 流りりり 肉物てく かのりり
 七のりり 竹瀬 流りり 流りり

大正十一年
八月廿九日

おうしん白
左傳 卷三
小町踊 卷二
婦人双六
珍事 双六

高 寶
新 寶
大 寶
大 寶
大 寶

大道庵

神祇 卷三
五十三次地名
いづろ 縁倉
今更 沢
惣て 坐き 伝 承
地名
幸 房 宛 の 句
山 敷 執 賢
軍 傳 の 人 名
一 白 ち 分 ち 極
子 地 下
川 呂 錦 木
誓 寺 熊 寺

八まほし 神 白 伝 承 卷 三
穴 虎 子 神 白 伝 承 卷 三
夜 七 忌 忌 忌 忌 忌 忌 忌 忌
乞 の 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸
廊 の 所 所 所 所 所 所 所 所
裸 で 出 行 く 海 士 の 乳 世 世
尼 申 交 交 交 交 交 交 交 交
南 山 山 山 山 山 山 山 山
如 鏡 男 鏡 鏡 鏡 鏡 鏡 鏡 鏡
花 子 花 子 花 子 花 子 花 子 花 子 花 子

河川 水 流 始
下 巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻
或 公 傳 地 の 内

有門

向 言 言 言 言 言 言 言 言
通 系 系 系 系 系 系 系 系
香 香 香 香 香 香 香 香
此 言 言 言 言 言 言 言 言
こ ん ち ち ち ち ち ち ち ち
抽 ち ち ち ち ち ち ち ち
夜 半 半 半 半 半 半 半 半
の 川 の 隅 の 中 的 的 的 的
む 一 男 男 男 男 男 男 男 男
そ ん ち ち ち ち ち ち ち ち
曉 子 其 角 角 角 角 角 角 角 角
風 の 系 女 と 尺 中 ち ち ち ち ち ち
新 造 造 造 造 造 造 造 造

大正十一年
八月廿九日

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

何事も清き
白紙の如し
古事新事の
附白
三白の内なる
子言無あり

耳も眼もある降中の登
アとけらるゝあんな七代内終
一氣流りもて梓ヶらるゝ
窄へ密書き魚のふととろ
去こく歌く毒の玉門
いしとる籠のたぬ者の
ふりてふとる言はるる
新造新居の雪子菜こらる
昨迄の雪子言のにお後
うのちの鳥ある下如く後
猪らあつて砂の宿あ
日奉の虎の如く一足
能同山ろく松舟を葉に
是の雲のまゝ大賊
裏をみるのう激の正
高坂三里妻子日合し

珍重庵

前くまこころ
 ろかかき
 ちりるまは
 由かかき
 むらまは
 出ぬおま
 いのれま
 雲とま
 山の影
 他影
 影の中

小川
 雪齋側 大塚 聖齋

岸よりたの上の橋
 陸よりたの上の橋
 其る表の白
 肌をう仏を白へ負ひおろ
 さく子ま
 吸竹た
 千村仕
 二男
 高山の藤
 水糸の
 影の中

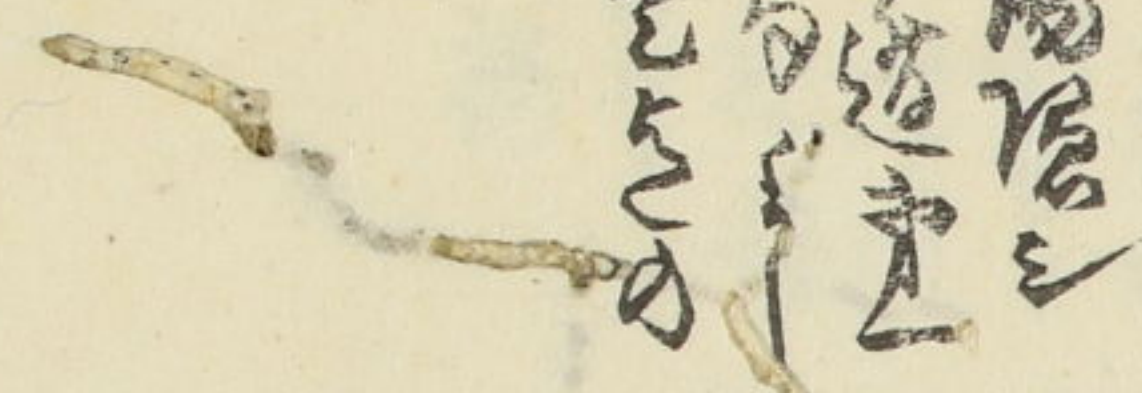
○今イ十九

俗云法君入
吐一きり色
くきり今め
うきり今め
うりかき

好重香
好重香
好重香
好重香

万年青

非 秋
冬常 蒸饅
碧色 水邊
此有 桂也
實情
葉の 湯浴
三日の 遠走
うきり今め
うりかき



身子 煎 煉 湯 歩 行 の 木 加 木 摘
色 毛 毛 の 髪 子 髪 毛 の 髪
好 ず け ぎ 揚 肉 の 下 地 意
筑 毛 毛 の 髪 子 髪 毛 の 髪
叙 大 漢 毛 毛 の 髪
淨 毛 毛 の 髪 子 髪 毛 の 髪
立 山 毛 毛 の 髪 子 髪 毛 の 髪
為 毛 毛 の 髪 子 髪 毛 の 髪
擗 毛 毛 の 髪 子 髪 毛 の 髪

納福方

好 雙 鳥

天 子 毛 毛 の 髪 子 髪 毛 の 髪
年 毛 毛 の 髪 子 髪 毛 の 髪
お 毛 毛 の 髪 子 髪 毛 の 髪
神 毛 毛 の 髪 子 髪 毛 の 髪
行 毛 毛 の 髪 子 髪 毛 の 髪

去年の春に於て、
 第一の山崎の如く、
 何れも、
 附るを、
 毛、
 詩も、
 一程の、
 去程、
 小、
 腹の、
 美、

蘭婦人

祿親、
 急の、
 軍、
 女人、
 百人、
 廿八、
 巴、
 牛、
 考、
 号、

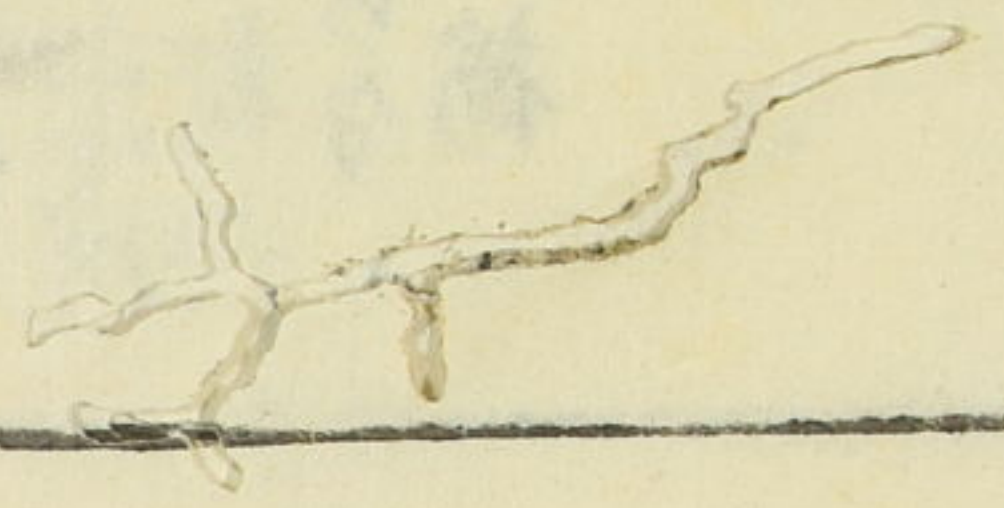
小川町、
 細井、
 市、

岩手智町

極、
 完、
 後、
 去、
 萬、
 全、
 赤、
 走、
 鳴、
 知、
 株、
 中、

舟
州
州
州

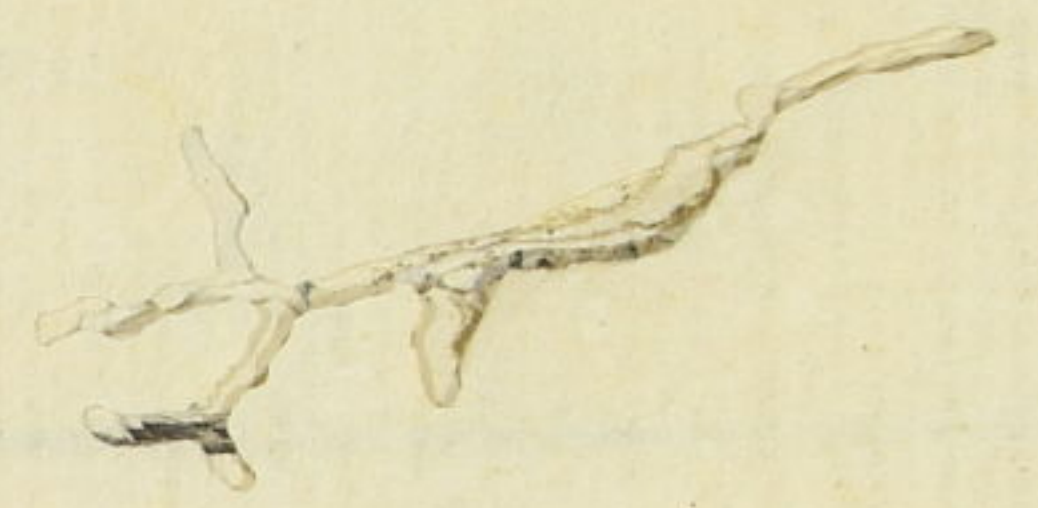
舟
州
州
州



末ぬ人をよめるの浦のうらやま
夏山の中をよめる分け智の弓
琵琶でいむむごい皇の流
育ち三人子由乳房 二節
白石の鏡人 船のまゝい
是非の中をよめるふた
青くして石のうらやま
小紫くしてどろろ下
丸綿のよめる 情をよめる
小日向の橋の恩をよめる
虎のよめる 虎の子の
何のよめる 七曲へ糸
砂さへ付す布をよめる
言尾のよめる 新をよめる
白の巴の股のよめる
さす 波をよめる 日蓮のよめる



一册
一册



耳洗庵

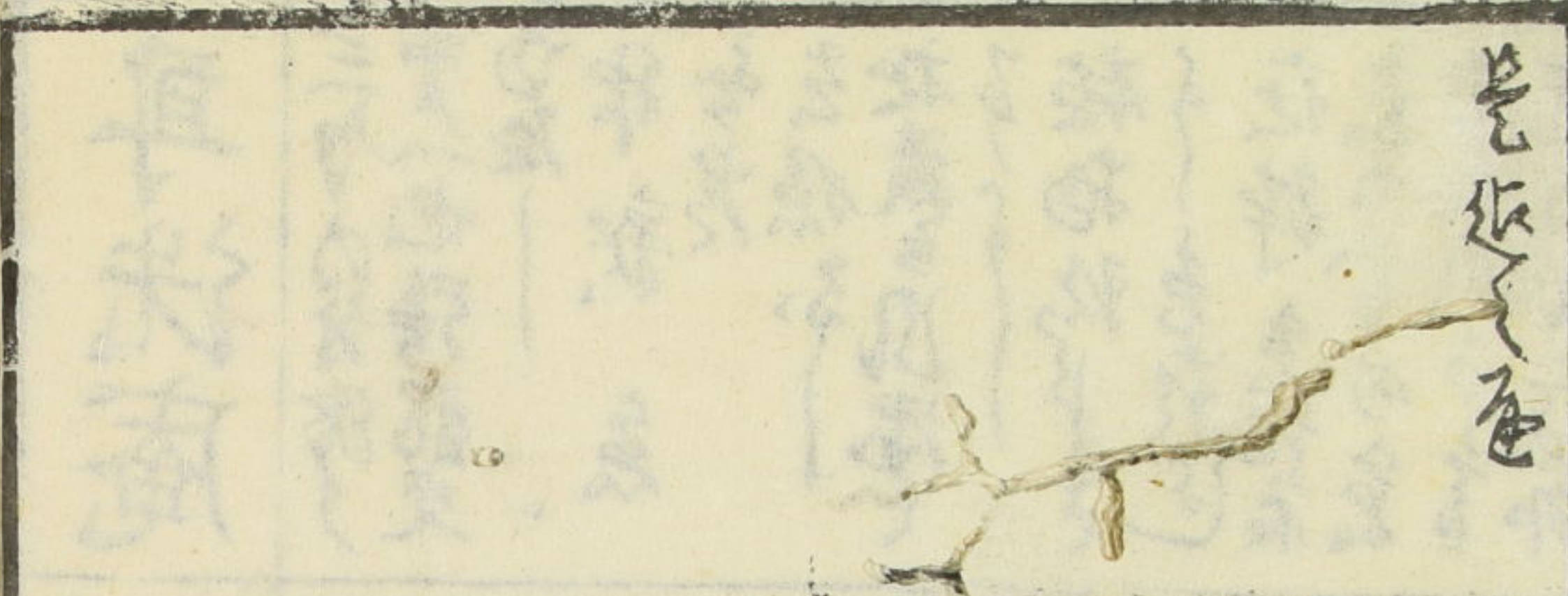
三月の内分路
一也強弱交
ゆに
作親 忌
去極
在義之風流
柱拍
在狩
急の二
大
息

徒流側 石原徒流

菅
志
ひ
黄
白
新
茶
二
毒
山
鞍

二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十

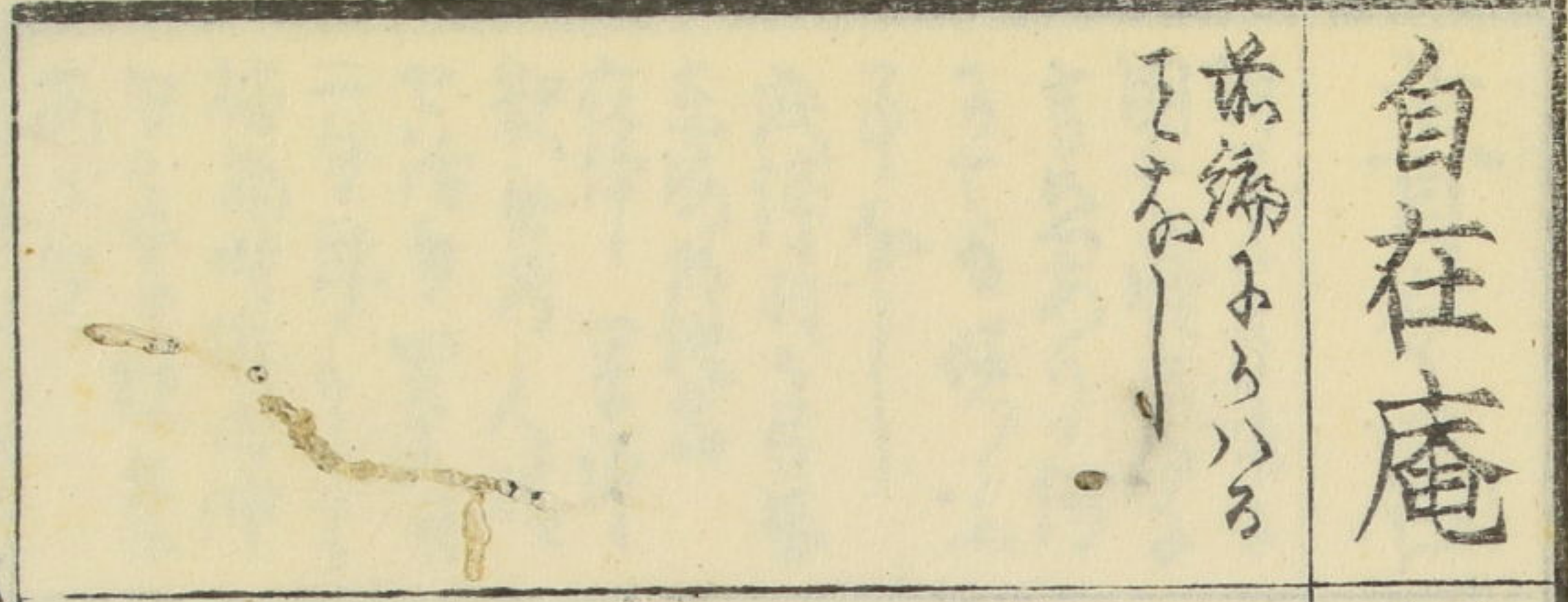
是返くを



美籍子凝てくくの痛内
親の三層二階の酒々香々
めくく心破るに牧方
十陵ハミヤ山 の 懐
雨 日知子ぬぐる小佛
暈 梅しとくく 形子香刺
鬼 秋寂一箇人の揚子あつて
一 夜子居る 形 枝の夜り
又 虫し枝の枝 枝の七八
得 枝の枝の枝 枝の枝の枝
百 枝の枝の枝 枝の枝の枝

自在庵

未編より
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十



むら
むら
むら
むら
むら
むら
むら
むら
むら
むら

誹道人能阿

發林きくく牛へむら
経 經の教も福村のあつて
女 女女の化粧ひ山や茶七
於 於於手三端の龍を在る
果 果子多啼 冥のうら
川 川一節る 墨の境め
坂 坂の奥 枝の枝の枝
枝 枝をきくく 枝の枝の枝
友 友友子あつて 枝の枝の枝
海 海辺の月を在る 山
山 山と山との 山
山 山と山との 山

分有十光

女の表を拝引 引 おさ
 志とらふ時ありき名きてまむの紙
 痛む母の骨を突のからさき子
 佛弓く乳を子けりける魚鹿
 改痛の境もむ教の四
 水山の象子けりけるう啼
 坂人由こりりくくぬ冥
 ちろちろく層穴子一ツ 蘭の売
 とくかかぬるも月うき一ツ
 葉の葉の飛んで海をきうふら尻
 色子赤くあつた子乳の歩
 矢病の血一厚いりてまゝの息
 うき名なき花もるを葉の枝の
 伴 縁の紙流くくるとんご徒
 けりける縁くくるとんご徒
 葉子けりけるも病むの承きぬ小

楽 歌

小岩川後町 田舎村氏回唐

生 煎 山

休 親 子 帯
 費 金 上 群
 人 情 軍 群
 植 地 軍 群 の 白
 河 川 流 流
 時 時 押 瓦
 赤 子 水 人
 己 身 も ち ち
 あ り の ち ち ち
 長 春 春
 長 春 春
 よ ち ち ち

ち 春 麦 刈 中 小 地 の 交 合
 ま へ 春 合 一 嵐 の 交 合
 楽 の 傳 傳 血 筋 の 二 人 合
 流 流 子 合 一 合
 葉 と ち ち ち 合 一 合
 一 坪 の 花 葉 流 合 一 合
 花 の 葉 子 合 一 合
 約 と 合 一 合
 花 子 合 一 合
 肉 膚 二 人 合 一 合
 花 子 合 一 合
 花 子 合 一 合
 花 子 合 一 合
 花 子 合 一 合
 花 子 合 一 合

二九

友齋

附ハ造りて
三分めよ
法後のみ
おろす

麻布まき川岸
仲の甲

合歡堂法徳の七世
内田清山

お赤らけ
頼ひ
お六
妻
中
ちん
お
お
お

クイナ九

、青のたぐり、小室、ふぼる、ふ
、藻、膚、ある、一、門、方、の、玉、
、令、よ、か、光、る、相、う、あ、あ、甲
、く、り、し、る、を、ぬ、へ、鼻、の、穴、を、う、
、秋、高、の、山、を、ま、く、半、峰、を、う、
、砂、こ、し、り、ま、る、や、り、る、感、涙
、よ、の、者、絶、を、の、介、の、初、海、を、
、を、強、正、て、あ、く、る、煤、掃、
、碧、嶺、を、行、志、あ、て、十、五、世、家、を、
、泣、中、酒、飲、て、傍、ふ、人、を、行、
、あ、く、初、室、の、あ、く、る、ま、あ、し、
、日、枝、り、る、穀、桶、を、妻、の、為、氷、
、素、清、は、白、く、掃、か、ま、後、
、野、子、鳴、け、の、籠、の、籠、を、移、り、そ、
、河、清、あ、く、り、り、り、る、の、改、け、り、
、海、素、ハ、そ、の、ち、の、け、の、影、着、

俳諧坊

茶、の、か、さ、る、
、ろ、か、り、
、意、の、う、ら、り、
、神、歌、実、情、を、
、も、と、り、し、て、句、
、作、あ、る、を、

芝新抄後
本歌集内
大谷氏同和

百化

、茶、人、子、由、の、い、た、の、後、の、者、と、あり、て
、鏡、た、り、り、の、家、業、あ、り、る、
、あ、く、人、を、強、て、餅、を、ま、ま、の、毒、を、
、祓、の、ち、あ、く、る、ま、い、お、原、を、う、く、
、人、の、上、と、あ、る、の、と、を、あ、り、し、ま、
、所、色、の、輝、の、焚、火、の、昇、り、
、凡、と、ま、り、例、を、ま、ま、あ、く、る、ま、
、今、の、業、内、ハ、あ、く、る、あ、く、る、あ、
、娘、を、あ、く、る、ま、ま、あ、く、る、ま、
、棒、子、ひ、け、り、と、ぬ、え、り、り、
、崎、の、岸、を、か、り、と、影、を、流、し、
、く、ま、り、る、ま、ま、あ、く、る、ま、
、と、り、り、と、流、も、あ、く、る、ま、
、中、を、あ、く、る、ま、ま、あ、く、る、ま、

止心

多作九

相詰社

ぬゆりよきぬき素魂をよと盡
くろくしむくく半を教くしむ
ほり子落てかしくらうくつ
くけしの子もあぬ人子とさされ
うきかちのそきひ中らう
秋風の音あてんらう一人こも
尺でそぬらうと人うらそあ
名らうらうき素衣よりよきあ
こらうの男とさぬてらう
自中たる積の強きらう
如くくせぬとさぬかしく
ゆき中をせぬとさぬ水とさ
あそぬとさぬとさぬとさぬ
不埒した押ハハハハハハハハハハ
かしくらうとさぬとさぬとさぬ
く膝をとさぬとさぬとさぬ

雲阿觀

沽山月姑

久米社麥

好新りり
ものふり
沽山点の素
まきり

後切切去の内ぬ 袴 他
香坂出峯の雲のきく子まのほぬ
引るくくくく 袴の 床
折とさぬ 妻の形ぬ 親の
二人りりりりて 突出の
腰桶子あふくをてある 鏡の
夏士七目高子方角、所く
夫切つ子ぬと徐福の素 衣
別ぬき素 袴と不き用子ほく
赤和く杖もたぬぬの 隠し 君
ぬ礼の 百波 又の 幸 服
切とさぬとさぬぬぬぬぬぬぬ
死らぬ実を産く 悔ん
暮を子ぬ 膝と 泪の 旅もとり

七

鳥居

形可なり竹の形か
 嫁の支那子母の
 大徳子遊をばんそく
 一着の形
 老の月影流るる
 てゆくとくさくさ
 有るはあやみの世の中
 存るはあやみの世の中
 孝女は幸ひある
 屏風は八陣の
 身の秋はく照君の
 在の中をたのむ

イナナ

Handwritten text in the upper right section, including characters like 伊弉諾, 伊弉册, and others.

皇武集卷

神 歌

戀 買

あの子

めい

あの子

あの子

在 体

Main handwritten text on the right page, starting with '手考の足... 内木場の名... 麻俣... 中... 籾... 藤竹... 加手解... 多々... 況... 笑... 控... 一... 戸の...'

伊田彦八郎

世中寶入馬

Main handwritten text on the left page, starting with '天地の接... 元... 留... 引... 大... 屋... 比... 芥... 場... 大... 林... 其...'

...

日升春を鞠抄ゆ... 鉄炮と餅既... 大黒弁をま... 元日... 杜氏... 丸吉の種も先... 園の... 潤の... 百文の... 和睡を... 況候...

如月巻

駿... 邦... 至... 買... 在... 地... 在... 地... 在... 地...

...

世中青白

...

Handwritten notes in the top right section, including characters like 月 and 氣.

さうして申す事ありて 窓
柳休音金一
煙る民音とせしむるを
有るらんす離れ 尸
淫いとせしむる二人り二市
向者よ志や金いと昔肉百鞭
ちんく 厚四角ありてちんく
即ち肉一とせしむる 刺
此うらうらひいとせしむる 月
坐家きつてすを喫て麻れた
さうしてせしむる 伊ふれつぎ出
とせしむる 同とのとせしむる
とせしむる 伊ふれつぎ出
ちんく 伊ふれつぎ出
ちんく 伊ふれつぎ出

乾坤堂

乾坤堂
大圖記人志
聖を 生れ
あつて
乾坤の
子年
左神 後編
あつて

下の
内

世中其電

引くものう一切あつて
小おちりて一好の登り
ふんすの 教
大なるの 密あり 和
弘神子泥のみま
大川よ一たの二ツ
子の白してりや
武名者押よさ
少具是の五條よ
あつてきよ
えりやいせの
此縁の

淡路の地味
淡路の地味
淡路の地味
淡路の地味
淡路の地味
淡路の地味
淡路の地味
淡路の地味
淡路の地味
淡路の地味

昨ちのしお堂のしらの地り
今もあつたしお堂の地り
必死の地り
田角の地り
船の地り
才の地り
橋の地り
はるの地り
一まの地り
祠堂の地り
河原の地り
三乗の地り
丁子の地り

全財産

三石の日記
第一巻の二百
神歌 在解
五上人名
子春の白
植物の白
あひ
まかゆあても
まかゆあても

風俗考

世中取

金勢のなま柳子とんととの
舟中の一葉 付くこ 大 妙 日
ゆりくと斗りせん生 借りてけ
ぬけ及るる利貸りも 女 ぬ
せのくまふふ利貸りて女の
牛の脊より 山の麓に保松を
房揚枝のぬれぬの 尻 尻
藤のくまふふ利貸りての 藤
ぬれぬのくまふふ利貸りての 藤
敷くつてある井戸あり 渡 所
魂うらけ 百のまふふの 藤
胎極の藤の地り 吹 鳴り 煮
まりこまふふ利貸りての 藤
被五ねな蚕の地り 藤

ふふふさん此處歸りハ丁ウ
おしくまてハめーと修己
修己こころ村の名よあつる
手摺こころあけて大原
村の中うらあつるあの子を
養生一の棺も焚けやた養生
赤い名のはりぬ 審の 耕
よその子うて 結をふ 髪
あつるう喰て見せる者 病
あつるう喰て見せる者 病
定家かつるうと唐の戸端り
四よ和良の赤イ伎うら
洞堂の修己 飯切の墓土
うらう喰てもあつるうの傘
二おの目の墓あつるうけ一七
一おの目あつるうとあつるう

若水葺

身み所しよををくく歩
鞍あ子こををぬぬ撃撃
勺すく他たああやや
破やぶまま八はちららるるきき日ひ
子こててもも言いふふ長ながのの
能よ在あ言い囉ら子こ
上かみ方かた筋すぢ常じょう備びのの地ち名な
本もと海うみたた本もと者もの海うみ
乃すなはのの地ち名なくく
神かみ祇み一ひとのの宮みや
牛うし馬うま鷹たかのの
防ぼ野の使し節せつ系けい
至いた良ら神かみ者もの時ときをを
夜よ真ま央あ

獨立 岡林陸馬

芝三田小山坂口

鞋か刺さををくく川か子こ流り矢や
おお足あたたくくもものの場ばへへりりけるる火ひ
迄いたままのの春はるハハ意い由ゆ此こ朱しゆ本ほん平へい
武ぶ庫こ山さんハハ比ひ子このの田で長なが子こ虫むしのの橋はし
得え子こ凝こるる角かくのの腸ちやうハハ別べつ
比ひ有ありりややてて皆みなけけハハをを
虎こ部ぶ寸すん野のをを由ゆ一ひとのの志し
空そらくく元もと日ひ子こややくく撞つくく
雲くも家け守まもりり隔へてて慈じ武ぶらら片かた使し
市いち室むろをを解とけけハハかかららちちるる山さんははくく
玉たま子こ墨すみのの人ひと質しつのの良ら
去こ極ごくのの極ごく由ゆ百ひゃく足あしのの相あ
妖あや怪かいのの極ごくくくききくく長なが
色いろ得えくくるるああままのの朋とも揚あ

鄙傳の句傳の景
去るのり 奥向
山渡口の山守の写
呉服のり 山登
長尾の刀飛治
名代 杉身
何山とつた月
寺のり 利口は
日代ありんし
誓形寺
東山院 慈妻寺
雲林院 宝吉
祥宗 山伏
庄 二肩
牡丹 橋

皓蓮社

前くのなり
会のり きりり
とらま
江戸を在
江戸のり
くろ地名
極お 多敷
かろし
くるきりり
長あり

三位の意 海 蝶
仏を境 橋
物とさるる 柳 葉 葉
江戸の 初め 残 骨 七 買 不
富 盆 子 本 の 昇 の 白 の 龍 為 寺
一 倍 深 の 狛 子 の 一 策
尾 子 子 の 荒 れ ぬ ぬ 一 宇 治 の 春
者 主 伴 の 出 る 由 漸 々
望 一 由 交 る 藤 野 の 連
弓 力 と 由 重 一 頼 政
此 表 を いた 本 能 久 怪 意
言 水 々 由 由 風 の 古 寄 子
子 重 持 たる たる 月 波 村 中 子
龍 口 の 初 渡 行 る 由 秘 一 子
宗 朝 の 子 重 持 たる たる あり
味 山 及 たる 美 たる たる 麻

元祿調

紀

了阿

市 本 村 組 一 子 重 持
の 陰 軍 果 有 幸 有 ぬ 為 也
一 の 是 なる 術 由 か 存 あり 廣 なる
此 一 一 なる 一 人 ぬ 正 重
一 子 重 持 たる たる 子 重 持 たる たる
巨 魁 で 重 持 たる たる 一 一 子
其 本 本 ぬ 一 枝 の 末 之 ぬ 新 意 也
其 一 一 なる 一 一 なる 一 一 なる
枯 一 一 なる 一 一 なる 一 一 なる
紙 一 一 なる 一 一 なる 一 一 なる
男 子 一 一 なる 一 一 なる 一 一 なる
重 入 子 一 一 なる 一 一 なる 一 一 なる
み 一 一 なる 一 一 なる 一 一 なる
よ 一 一 なる 一 一 なる 一 一 なる
風 香 一 一 なる 一 一 なる 一 一 なる

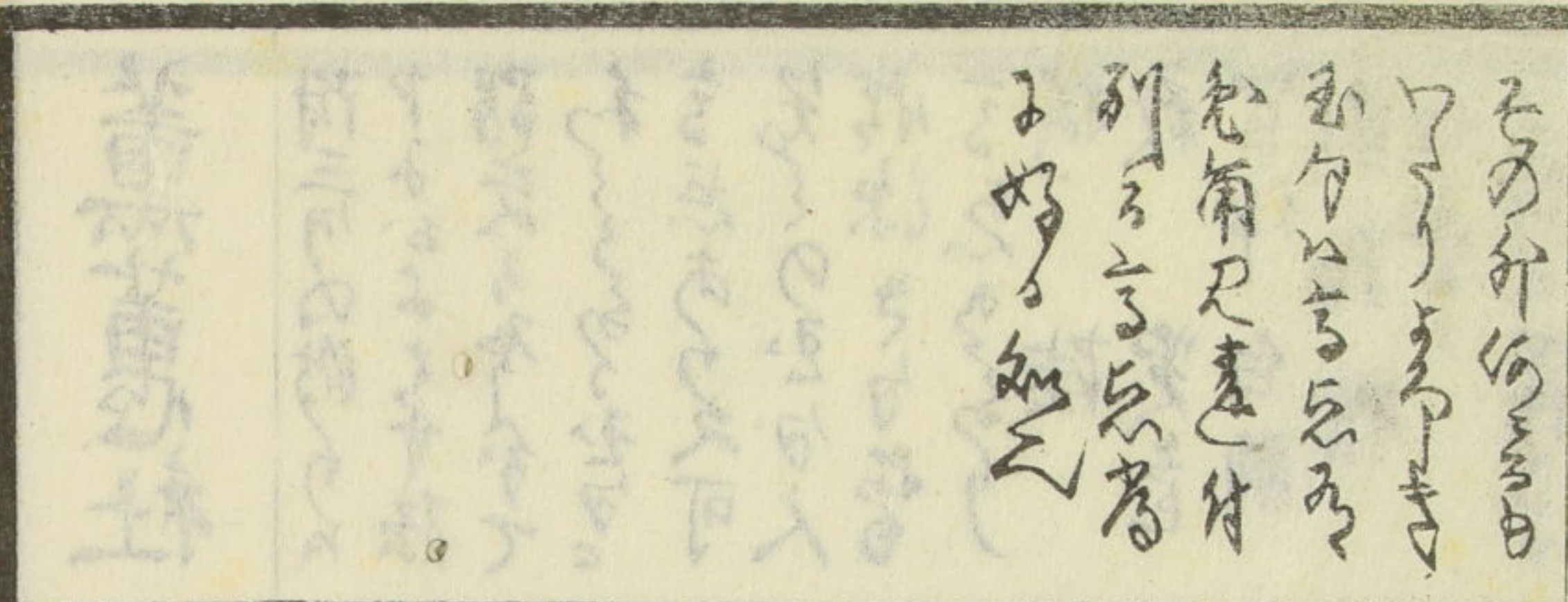
淡

十の井をいひ出す 嘉祥の日
仇の火が葎の輪眼をよむる人
十のあをたぐりしをよ親高る
淡 弟の内の 命由 糸 帯
たぬの啼み子音 緬のあし
大総 素人製の内ぶしんゆく
曲るまゝあや一ツ階子陰
年の時きにぬりこそく 業 著
名子あひひぬ ぎい 大 小
計六 古泰の子一人 野の内いぢりころる
乃成ちゆき之由向と内 後 組
あのかはまの 扇つさるる
雪の山海を 走馬あけく
雪 葉 あけく 透 膝
とあまのつまる 益 者 三 友
よの侍で 忍る 務め 危 丁

いあーま

了何は物
紀 ちあ青
治
母と 一着
秋 持 味
夕影のむいふるまの美気
緋 あどし 忍る 内 葉の 心
列りくるもの 何 葉の たく
母 白く 膝 みる 魚 の 市
花 花 みる みる みる みる
壬 甲 乙 丙 丁 戊 己 庚 辛
集子 入 秋 菊 菊 菊 菊
葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉
葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉
葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉
葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉

その弁のうさむら
つるしうさむらき
おふは言ふは
お前尺達付
列言言念者
子好く知ん



葉り知る者ろく
小藤 有る 後 旅 先ゆ 妙
一人のうく 陸乳 眺る くら 珠
後 不 始 しく のみ ずり 冥 古
百五 梳 細 の 洗 流 しく あり 鯉
春をさくころの母々 喜ぶ 歌
枝くさくさく 流るのさく 刺
勢 所 由 元 苗 休 の ち ち 秋
帆 影 中 終 際 終 を 嵐 出 崩 人
一ツ 露 の 月 六 秋 の 無 金 計
六 金 の 洞 子 井 倉 庵 の ふ 百 丈
屋 木 り へ 花 本 丸 の 西 所
官 途 の 行 へ 海 原 の 日 暮
扱 遠 へ 嗚 お ら 戸 や 戸 だ ば
扉 一 引 け ず 本 一 葉 帯 の 橋
下 橋 へ 飛 ぶ 赤 揚 の 籠

勾樹庵

貞元のをきよみ
附らうりをも 隔
まや勾の尺お
しるをさす
平らうらうら
あやふなす三
くはくはあ人
まあうり
諸神 冥さ
風波 奇つた
尾伝 八知子
もろくく
あゆむあゆ

芝志ん 城
松平 申 登 志 松
ねト 申 志 内

吉 五 陵

在るを推し 必とて 自判の病
伸きさう 時 由 注 籠 り 力 痛
らあう 女の つり 心 柄 天
さう 隆 の 光 せ 坊 子 比 西 善 段
蕭 徒 の 一 一 音 の 上 ぶ ち じん 子
かまう ね 音 入 きく あり あり
公 孫 の 孫 は ち ち ち 一 時 白 あり
相 獲 へ 陸 の 大 ち ち ち ち ち ち ち
あう ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
菌 や ち 人 ち ち ち ち ち ち ち ち
平 子 孫 孫 孫 孫 孫 孫 孫 孫 孫
是 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
古 方 東 の じ ち ち ち ち ち ち ち
様 持 ち 鬼 打 ち ち ち ち ち ち ち

余ハ下ヤミ
カクハ

余ハ下ヤミ
カクハ

附録のむきひとありてを祓や引
春移りてハ小列由 龍日氣
仏より比丘尼のりゆめ 人極
おろしとせきしと帯礼の義
男一とせき 女由たのし
夫夫とてまゐる 父子象上
猶と抱つて白い 容 此
あしと云の頃十月の雲
夫ぬ喰の音響ハる
色子中ののし 尾り揚 扱
儀の中て 女と 鳴川
家の山あて せりる山 討
跡跡ハおろし 穴中 後と
言々 居るを 討死の 新
坂くると 焼討の 灰
死者 為ひ 乾葉 した 樹

梅長者

強弱交るし
付三石の所り
歩一あり
弁新 後侍
法衣 地衣
薬 冥衣
袴 袴
芝居の内
風流ある白
一白を利は
能る人

冬ついで
白のむき

無佛

神をちとく 祓く事
曾子あり 赤うさ 母一人
十日と 旅る 山の 十意
借きき 旅神の 海の 意
道り けり 切 命の 意
松の 松の 松の 松の 松の
通 辞と 泊 会を けり 松の 松の
仏 一 物 金 兄 松 た 松
どの 山と 降る 水の 松の 松の
縁 昨 ある 時 三 松の 松の
三月 松の 松の 松の 松の
大房 中 松の 松の 松の
女 中 松の 松の 松の

〇
ク
イ
ヤ
カ

〇
ク
イ
ヤ
カ
...

古極菴

古極菴子移り
有り

山石所出及坂下
戸さき甲
法傳子ウカ

雁来坊蘭香

山石所出及坂下
戸さき甲
法傳子ウカ
...

〇
ク
イ
ヤ
カ

編み血筋子の中されり
元日也夕アハ清人 大晦日
百五小判より玉高うさくひのも鏡好
昔清く一屋細の 結構
糸坂三千里雲子日さし
柄ハ美くえんて赤いハ新
年よりつたれを注くのか
極一筆大各のさく 強なる
下編祥のあに 丹精
入及く入る雪子 ぼらめく
襟 切ら山へ 雲金
責口の志れり 景勝の言案
尺もの急了 内親十年
内より 圈の介して 泣母
良室一 浪川 泣き 只の良
裏垣の急くぬける 湯息

分不十六

人の初る根を尻の中ぬぼろりり
 大まか真常のりりり 元日
 作んで笑ふ真常のりりり
 二十五年作中絶のあるりりり
 本食常人のりりり
 一生を云ふ火を和心
 序の湯浴ハ中心のりりり
 用を食ワシ繁切ハや
 難帯ハ扱内
 男ハ先人考ヤシと号
 染木梅片ハ山の依
 交後と云ハ山の依
 下ハ先人を採多ハ茶
 多ハ先人を採多ハ茶
 後のりりり横手系ハ入

陶後園

陶後のあり
 陸路と云ふ
 非親 実情
 名書 漢
 穀 在後
 書色 葉
 浮切 葉地
 仙人やまのりりり
 何りりり後
 寂よりりりり

功之阿部
 月夜氏同和

鳴九華

振うれ佳掃 出に法 納を
 作坊は終り ねと後 扱りりり
 發突と書てりりり 妻ませぬ
 連々と書てりりり 妻ませぬ
 才と人の云れりりり 秋の書
 三ツの陣の務 初く 務 負 階
 下りる妻の 昔は 慕 思 言 口 柔
 一ツの妻の 昔は 慕 思 言 口 柔
 尼寺は 才と 人の 云れりりり
 本本の 根ハ 陽のりりり 雨 如 子 梅
 一ツの 妻の 昔は 慕 思 言 口 柔
 人布て 牛 玉 びりりり 清い 後
 化 扱 が 筆 引 張 て おりりり ち 行

名

酒香と只のぐらう言新の言
きつた女の子の生くまの
空に上りて青い一光生
因拂って雨を吹く
七月とあるは荒れ
名い車馬の物影の
ふれこちれて蒲を
連きり落しつる
松の葉名一葉の
一葉の口は流るや
行よあつて
相合はつて
揮一ツの
舌の砂糖よ
これ下
り焼
るよ信乃
府さ
くさの

槐 窓

強弱交り
三月の
言
廿八
名
化
あり
あり
あり

井上極

省 毓坊妍尾

一目
目礼
本
千
納
初
中
あ
大
め

あつた... 結地... 千あり... 石の... 言... 極... 二... 松... 言... 根... て... 省...

あつた... 結地... 千あり... 石の... 言... 極... 二... 松... 言... 根... て... 省...

北窓

北窓

林友阿

是... する...

事... 天... 丁... 分... 一... 承... 十... 花... 花... 尺...

美野のおあるお子坂の漢村内
持くくき教を深し子を傳
響信をいり心のをや終く
古くありのく響はくし三月
首くくくくりの積くはくし
三年治の西風吐く減
津波のため根子ぬけし知く丸
列者く供馬の野送り
たかしくき帯をうすくあぐあ
糸をみあぐく僻の大房
松田の松ハ葉のあつ内
賢くくくおくくくくくくの文本
丙午ても甘くいさくく
尺人々の内ゆ村くくく
八村さハ崑崙人のくくはく
於て地をぬく弱中の委

清寧庵

佛或私のみだ
下りをもくくく
付三竹の船り
あーくゆぼい
あーくゆぼい
くくくくくく
万化子くくく
おさるあり

六丁
火清をる月

上田一鳥

石甲の清仏法の外ゆ
秋の由れを美くく
角 仰りきふきふきふき
美の地め目く又か
弓矢のききききき
小名名ゆりはかききき
虎きききききき
をんをんをんをん

春來汎

中...の...
弟入の...
口河の...
山...
葱...
毛...
容...
尺...
口...
寺...
小...

春來汎

芝...
丸...

芝 春來

神...
中...
何...
母...
十...
板...
ひ...
軍...

子...
祈...
月...
と...
ち...
女...
南...
内...
右...
婦...

○五ノ丹丸

香天

己方のめい善めて酒のう
海山の志つてく人あつて善
二人し夫のまゝの良
玉柳の傍て手向の思ひ
摩訶末の入居披高の
子えくつてあつる善善好
六十余期人鬼入る
好花も花もつて武名修
長房三人あつて若ひ
放屁をしても智識も
初を初とて良を良の善
やめてく寧輿あつる
あつるのまぢりつて
酒堂へ下書へかきける
松梅のまゝくつての
善くしてあつるの公

梅窓

好まぬつて
あつていへる
春秋の二
を結ひぬる
言長かその
よきあつて
して自ラ一
のほめて春
秋つてあつ
るもの
二つめ見
一余の
る事

本わ加加
めく長
組

木材

来為

善く女房ひとて
志からくつて
ちまたの
あつてくつて
おちくつて
汁の
割れくつて
おぼろ
天をぬ
ひくつて

鹿角付ケの
尺元一尺一寸
おたら一きと
毛面又なられたる
うらうら

毒二人り夫ののせ
奉らひののかのし
後訪様の比着てを
お作りた今のお竹
積るるハ仏のめ
長生ハをまきと巴且
ハ界のちんこハハ
鬼大政くく月を
菊新丸ハ漏てかす
瀧をんてくく比
安者系のありびり
死るぬ余を
高良なをたを
楠屋ハ痛ハハ
肯言ひくく
貪欲沐を 送て出

珠迺屋

弟編中
新新
柱
かか
二白目の
尺
小川
井戸
細
新

小川
新

至言更 田佐知

角赤の志多ハ
飲祈直昔ハ
苗のくち
尿管子
原面より
昔ハ
お
お
田の
三白
大
立

二ノ分作廿九

のり

狂歌集

泥坊うらなひ... 西新井... 古銅の... 内火... 虚を... 小先... 力... 公... 角子... 肥... 二日... 路上... 不礼...

黄雀庵

一名曲阿

古麻晩瓦

之白の... 由と... 多... 非... 左... 之...

伯父... 玉... け... 天... 天... 降... 天... 掠... 坊...

廿九

衣揚とては、
 医考へん、
 一白主、
 仲の所、
 御の賜、
 樂の跡、
 田子、
 藤は、
 七文、
 藤葉、
 文魚、
 日月、
 天皇

米守庵

是の心、
 何の心、
 神統、
 在神、
 実情、
 武術、
 種々の、
 風流、

是の心、
 松十、
 心を、

澤

甘合

何者、
 法、
 大、
 迂、
 送、
 色、
 天、

米亭
米亭
米亭

米亭

付添くふト
子及を強弱
とゆふらし
米亭
伸くらう
弓言の怪
能瀧丸
生歌

二十美物白くも根の学家
足袋高よりあてぬけの足は
中へくさるる月の針 美香の土
おふさのたきかきで 破るふり被
ゆき鳥うら 雲霧の 及びの
とくも死ぬる 積り能く たい
ふいとく 痛む身介の 祇とめ
下りて 友海を 針具 株河
さきと 雲を 糸より 多く
ちうぬけを 芦へあてて 酒造
靴をさして 抱きまを 米
暁と月子ささく した 用の 賤
唇の子を 明き 子
抱帯て いくらう 巻く 糸
珠子子て ころり 繡
美の月を 手えく ともて 楊柳 輪

池 雪亭

三田は足城
あや他人のあつたる 実
胸の娘も思ふ 泪の 母 美
世に 志 志 志 志 志 志
海を折る 舟 舟 舟 舟 舟
まき ちう ちう ちう ちう ちう
水雲は 岸より ちう ちう ちう
ちう ちう ちう ちう ちう ちう
毛ゆふ ちう ちう ちう ちう ちう
ちう ちう ちう ちう ちう ちう
くけ ちう ちう ちう ちう ちう
あき ちう ちう ちう ちう ちう
人 美 美 美 美 美 美
あき ちう ちう ちう ちう ちう
ちう ちう ちう ちう ちう ちう

息のこもるの緯世とて
 我死あふ七去の所を去るも
 ういへる多のうらむる花の
 寫す所あはるるあさゆの川
 一白ま
 うの脚ゆきまきうの腰を
 人買さしきし一筆深八
 うの天多のり粒子豆のち刀
 水くゆ湯き親にむさし
 男う石子ぬし一平用
 ぬすいぬるぬ流しぬ暮の
 日の中の轄ゆらぬ行方の界
 風冷もぬるもあつて衣の春
 年の度多あふをるゆ
 甲のゆらるる流忘る古
 言うららるる昔暮の暮花
 重林親あはるるもるる

星運堂藏板誹書目録

東叡山南下五條天神
花屋舊次郎

誹諧鑑

芙蓉山人雪成撰 中本 二冊

此書八明和中初編出板せしより當時まては三編小身
江戸諸流判者高良書校の向を拾ひ一本なり

誹諧礎

釣月堂一漁撰 發の枕書多のまに字多難忌神
小本 二冊 秋勇の調五七人分を是と云る也

誹諧綾錦

菊岡沾原編 但右の連名多の葉邊他他流の
全部三冊 侍鏡と流家をもし

誹諧持扇

李寄便用 以敷書世多のまに板羣一七他
懷中本一冊 小遊人懐中て便用と云い一冊也

誹諧 種卸 増補 三國人名牒 高井蘭山先生撰 中本一冊

日本大唐天竺名々の智を以て人物雅俗を以て其業を
傳をわくして誹諧附句を以て其端を以て其便を以

誹諧季引 席用集 撰者同上 横本二冊

以著の四季多物名所出の付令生類抄抄等其文字を訂
いはちやて撰出易くして其註釈を加へて其見下

誹字節用集 近刻 撰者同上 薄葉摺寸珍本

右の書は尚廣益 誹諧所用は物成場抄に成りし
池原の至宝は使ふ古々類を以て其法は其なり

誹諧増續山の井 拾穂軒北村季吟翁遺書

拾穂翁は誹諧を好みりく其書に注公せし和漢の情感
を以て誹諧の季を以て注釈として其一本なり

誹諧増補所名集 槐陽井躬之著 小本二冊

此書は後醍醐天皇の意所古語軍功忠義古又誹諧を以
て其意を以て其意揚其意を以て其意を以て其意を以

誹諧季寄屏風 古來庵存義撰 高井先生校 一雙 近刻

存義老人の工事を以て四季を一枚乃屏風として其意を
枕上五屏として其意を以て其意を以て其意を以て其意を以

誹諧手引種

一陽井素外著 中本 二冊

上の巻は四季並に評釈別離羈核名所意追悼画賛唐
賀木發句乃に芳下の巻は附合乃に屏風類に初巻を乃く

誹諧通言

並木舎五瓶著 小本 一冊

戲場は作者又と湯へ浪死の者より東都小よりて業乃に佛僧長
と依りて事と撰と見六二都に極里の業を審再誌七一平也

誹諧玉池雜藻

一陽井素外編 中本 二冊

以書に若くは多量に佛僧の公席に小見引
中より隨筆乃に平なり凡流も存小此業一得の事

誹諧四季發句帳

前後 二編 四冊

流行不易なる高時の要作とあり、
之れを拾ひて冊とに俳諧の好

誹諧核免玖波集

小本 前二冊 後一冊

宗源の筑波の外歌と稱せしめり
自評の言を卷に佛僧古の便あり

誹狂天狗話

一陽翁編 一冊

活き意の奇異なる話あり、
小冊より此史はゆる佛仙と謂ふ

誹諧

月雪花同撰 四季津鳥 二冊

此二書は月雪花と四季歌とを
異名に奉りて解し、末巻に後を附

誹諧遊覽誌

葛野著 中本 二冊

津波の史に記す法事あり、
是を古きを奉りて古歌古句と附

誹匠家雅見種

小本 一冊

江戸流の判老史位定とあり、
之を遠境史に使ふ

誹諧麓之杖 俳宗没古年表
水戸素絃撰
一枚摺

蕉翁表林柳居句選 三大集云
中本二冊

誹諧千里獨步 同撰
蕉門傳書
二冊

誹諧二冊子 四世沾山集
發句附合二冊

古采庵存義句集 圖大撰
四冊

誹諧百福壽 樓川年賀集
三冊

誹諧櫻合共歌仙 存義二例
獨吟二冊

誹諧四季句帳 江戶点者句集
二冊

梅翁宗因發句集 素外輯
一冊

椎本才磨發句集 同上
一冊

芭蕉翁渡唐像 一枚

芭蕉翁鹿島紀行 持跋
一冊

眠柳居士發句集 門瑟撰
二冊

大無發句集 霜後撰
二冊

柿晋問答 其角
去來俳談一冊

雪門判者發句帖 一冊

誹句探六帖 完來撰
初中本二冊

月並少く艸 完來評
一冊

完來發句集 近刻
一冊

月並五句合 午心評
一冊

雪阿嘉理 雪門一派高点集
点譜木句一冊

繪入句艸帛 同撰
折本一冊

龜戸奉納發句拔萃 律雪庵評
一冊

律雪中運座發句拔萃 初編
一冊

得器更高点五萬十初編の四

一と云ふ山庵社中此惟とて又方句成
奥のりて清の奥と云ふ事極る意集之

其角附合句續松其角撰

宝晋及百巡忌れ等とて意流
其角先師附合の意とて撰言がこと

芭蕉翁甲子紀行真跡

一冊

誹諧松島紀行素性撰

一冊

山東遊覽誌 小本 二冊

此書八江の詩讀念合次其素跡と微細小
乃後乃小名社家の縁起と意致と云

山東遊覽圖會 北尾紅筆畫

右の書と云とて之東宮文信と
追加摺海境の沢淵泉揚れ休と云

向嶋 遊覽 画景硯の水 淺草庵大筆

大川橋より上本母寺まゝの障の意又
とありはまふ山一遠境の程塔と云む

日ぐじ八景圖繪 北尾紅筆寫

蜀山人先其の程詩一首と流ゆ
墨地乃外遠景は風景と見ると云

前句 新堀判者川柳考

以書初編を當時まて六十七編及ふ
小本都鄙句のりく流行する事年久

高點 誹風柳樽 新句集之出版

一冊 小本より其抄り修式事聰と云

音義

也

山東	山東	山東	山東	山東	山東
----	----	----	----	----	----

